
その灯りの導く先は

ポトフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その灯りの導く先は

【Nコード】

N7743X

【作者名】

ポトフ

【あらすじ】

ある日何かすごいものが堕ちてきたらしい。そして私、もの凄く強くなったみたい。それこそ、異形のように。それ故にぼっちだった私にも、仲間ができる、のかも。能力持て余し系女子の手探り奮闘記です。

序章（前書き）

この作品には、チート感や設定厨じみた表現が満載となっております。苦手な方はご遠慮ください。

序章

暗く冷えた室内から、夏の暑気に出て行くとき、蒸し暑くもったりとした温度が体を包む。あの感覚を思い出せるだろうか。あれはまだ春先の肌寒い季節だったような気がするけれど、不自然な熱気は確かに、私を包んだのだ。そうしてしばらくすると、無情なまでに足を止めることない灰が、空をじわじわと侵食していった。

あまりの恐ろしさにだったのか、酷く痛む頭の所為だったのか、今となってはあやくやだが、私は情けなくも家の前で空を見上げたまま、気を失ってしまった。

何が情けないって、同年代どころか、私より幼い子達でさえ倒れたりなんかしなかった、ということだ。更に不幸なことに、私の村は極小な上に住民同士仲がいい。私の不名誉は瞬く間に村中に知れ渡り、私の小さなプライドは大いに傷ついたのだった。

さて、そうはいったものの、私の受難は全くこんな小さなものではなく、言ってみればあくまでこれは序章である。始まりに過ぎない、取るに足らないものだとするって良い。

子ども心に屈辱を抱えたまま日々を過ごしていた私は、あるとき爆発する。

想像はつくだろう。あの、どこからエネルギーが来ているのか分からないほどに大騒ぎして走り回っている、悪ガキが、小さい頃に周囲にいなかった人など居ないと思う。そして彼らはなかなかどうして上手いこと私の堪忍袋の緒を切っていたではないか。あの悪態の癪に障ることといったら、言葉では言い表せない。

やあいやあい、と騒ぐあの悪ガキ共へ、憤りのままに悪態を返してやろうと息を吸った途端、彼らがぶら下がっていた木の、幹が、

火を噴いて爆発したのだ。

驚いた、というものではない。

ぼとぼと地面に転がって、けれど幸運にも大怪我をしなかったらしい彼らが走り去っていくのを眺めながら、周りで畑仕事をしていた大人たちの恐怖と不審の混じった視線を受けながら、私はぱちぱちと空気を讀まずに燃え続ける木を見ていた。

世界にきっかけをもたらしたのは、あの日私が意識を失うほどに怯えた、ひとつの天変地異だった。

遙か空の彼方から、堕ちてきたあの、忌々しい隕石は、世界中の人間の体に少しずつ影響を与えたいらしい。今まで空想の世界にすらなかった不自然極まりない、超自然的な能力をおせっかいにも与えてくれたらしいのだ。

例えば、私は発火。或る人は土へ潜る。或る人は風よりも早く動ける。等々。

私の住んでいるところでは発火以外の能力を得た人は居なかったのだが、ここで新たな問題が生じる。あの隕石の野郎はこともあるうか能力を至極適当に、不平等に振り分けやがられた。

村の強い能力を得た人が数人がかりでないと燃やせないような生きた樹木を、私はちよつと眉間にしわを寄せただけで炭にできる。

私は、特別だった。

有頂天になって、調子に乗っていたのはほんのわずかな間だった。まだ幼かった私にも分かるほどに、周りの扱いは冷たく恐ろしかった。腫れ物に触るように、どころか触れてもこない。遠巻きに遠巻きに、この間までじゃああって遊んでいた村の一員を、猛獣か異形かを見る目で見えてくる。

それからの日々は言うまでもない。まったくもってくすんだ生活を送った。

唯一、両親ばかりは変わらず笑顔を向けて、それまでと同じよう

に過ごしてくれたけれど、彼らが意図的にスキンシップを避けていることを、私は知っている。

周りと違うから、まあ、怖がるってのは分かるけれど、そんなに冷ややかにしなくてもいいじゃないと、何度枕を濡らしたか分からない。

犯人はあいつだ。隕石。

1 (前書き)

短いです

我らが大陸のほぼ中央に座す巨大都市、？都。もっとも文明が発達し、商業の中心となり、交通の要所であり、つまり人が集まる。人が集まるということは力を持っているということだ。数はそのままだから。その？都を統べる元首は、まるで自分が人を超えた存在であるかのように振舞っているようだ。

しかし、十年前、そう、あの憎むべきアレが振ってきてから、その磐石の地位は揺らいでいるらしい。それもそのはず、絶対の力で保ってきた権力は当然、それ以上の力にとっても弱い。地方地方に現れた強力な能力持ちがきまぐれに結託でもして蜂起すれば、たちまちのうちにどーん、だ。

そこでの元首がどうしたかという、集めたのだ。その地方に散らばっている「力」を、自分のテリトリである？都に。十年をかけて各地を調べ上げ、とりあえず各地でもっとも力を持っているような幾人かを呼び寄せた。

ありがたくも私も御眼鏡に適ったらしい。三日前、真っ赤な鎧の騎士と10人ほどの兵が私の家のドアを叩いた。そしてその場で尤もらしい演説をぶちあげ、父と母は名誉なことだと喜んで、そして私は今、馬車に揺られて？都に向かっている。

いや、もうまったく笑える。事実だけ書けば何か英雄にでも選ばれたようにも取れるが、強面揃いの兵達は不審と恐怖の混じった目で睨んでくるし、演説内容も権力にしがみつのおじさんくささがにじみ出ててとっても不愉快だった。何より、父と母のあの、喜ぶというよりは安堵した表情。

それでもいい。

いい加減あの村で肩身狭く過ごすのは御免だと思っていたところ

だ。？都に行って元首様に「力」として使われるのもいいか、と思う。一種の自暴自棄である。

勢いのままに家を飛び出したは良かったけれど、こう三日も続けてだとも馬車にも飽きてきた、というのが本音だ。夜になると一応休みを取るけれど、それ以外は動きっぱなしの揺れっぱなし、ときたものだから、尻が痛くて、もう。

横長の椅子に外間もなくうつぶせになってくつろぎながら、外を歩いているはずの騎士様に声をかけた。

「あのお！ 騎士さま？ あとどれ位で着くんですか！」

一瞬おいて、鎧でくぐもった声が返ってきた。

「もう、少しです。後いくらしにうちに都塔が見えてきますよ」

「都塔？」

「？都で一番高い建物です。見えたらお呼びしましょう」

ふうんと鼻を鳴らして、私は椅子に座りなおした。

流石に三日も一緒に過ごすと慣れてくるのか、返答は少し笑いを含んで親しげだった。彼以外の一兵卒達は未だ遠巻きだったが、こうやって普通に会話してくれる人ができるのは嬉しかった。

私は面倒くさい孤独心と退屈をいくらか満足させると、一人にやーっと笑って服装を整えた。次に指先にそっとひとつ炎を灯してみて自分のコンディションを確かめる。イメージ通りのものが創造できたことにこくりと顎を引く。

よしよし。

自棄になった、とはいったものの、私は少なからず？都に対する期待を膨らませていた。話に聞けばかりだった巨大都市？都を、こ

の目で見られることに子どもっぽい喜びがあるのは、もうどうしようもないことだった。

「た、っのしみ、だあ」

思わず口にしてしまった本音は、しかし幸いにも外までは聞こえていなかった、と思う。

こつこつ、と馬車にノックの音が響いた。先ほど「呼びます」と言っていたあれに違いない。都塔が見えたのだ！

私はもういても立ってもいられなくなり、馬車の扉を通告無しにぱつと開いた。ちなみに内開き。騎士様にあたる心配はないのであしからず。

「見えたんですか！」

勢いよく飛び出してきた私を捉えて、覆面の隙間から見える目が丸く見開かれたのが見えた。のもつかの間のこと、騎士様は至極落ち着いた声色で私をなだめてきた。

「ええ、もう目視できますよ。あちらです。けれど、馬車からは離れないようにお願いします」

「分かってます。でも、少しだけ、歩いても？」

未だ上半身を盛大に馬車からはみださせながら私が問うと、騎士様は無言で二歩馬車から離れてくれた。スマートな了承方法にまた嬉しくなりながら、窮屈な室内にしばしの別れを告げた。

足の裏が靴越しに硬い地面と小石達を感じるものの、なんとすばらしいことか。そして、相対的に見た時の馬車の息の詰まりそうな閉塞間は凄いものがある。

背伸びをしながらぴよこぴよこと飛び跳ねて見ると、なるほど左前方に何か木ではない尖った高いものがある。きつとあれが都塔な

のだろう。サイズのには小指の爪ほどもないのに、その手前にそこそこ茂った林があるのに、確かに都塔は確認できた。間近で見たらどれほど大きなものなのだろうと想像するだけでも楽しいじゃないか。

私はその後、何度もたしなめられしぶしぶ馬車に戻るまで、都塔を見つめ続けたのだった。

1 (後書き)

人でなくて会話なくて、つまらんですね

徐々に名前つきの人がですよ きっと

「でけえな……」

思わずお口の悪さが露呈するほど、それは規格外だった。

何が、といわれても困るほどに、あらゆるものが。そもそも敷地自体がやばそう。私の村だって自給自足の生活だから、見渡す限り畑、とかで構成されていたけど、それどころじゃない。まず外壁の果てが見えない。私のそう悪くはない目でみて霞む辺りにうっすらカーブが見える。

？ 都はだいたい円形をしていると聞いたが、この分だととてもない直径になりそうなのである。

それに圧倒されていたら、次に人。門のところで並んで検査を受けている人が、えっこれうちの村人口全員とおんなじくらいじゃない？ って位に。まだ中に入ってもいないというのに。恐ろしい。もちろん中に入ったら何十倍何百倍と人々。馬車の窓からちらりと見えた光景だけで卒倒しそうだった。

止めに、音。これにはとても閉口した。というか現在進行形で閉口しているのだけれど、五月蠅過ぎる。田舎生まれの鼓膜の許容量を遥かに凌駕している。

ほんの横を歩いているはずの騎士様の足音はもちろん、馬車の軋む音や馬のひづめの音。自分の呼吸音までもがかき消されて無くなってしまうみたいで、私は数分もしないうちに言いようのない恐怖に襲われ、馬車から顔を出した。

当然のことなのだが、そこにきちんと騎士様は居たし、馬車もゆったりながら動いていた。馬たちも通行人を迷惑そうに見やっ

を振りながらかばかぽと前進していた。

それとは別に。

状況確認の為に顔を出したはずだったのに、その私を安心させる情報が入ってこなくなるほどに、私は圧倒されていた。

嫌な例えだと自分でも思うが、木の根元によくあるひんやりした石をどけたら見つかるあれ。アリの巣。あれの出入り口付近はこんなかんじだったよ。

人間がまるで一つの流動体のように、うごうごうぞうぞう通りをひしめいている。怖いとか気持ち悪いとか思う前に、私はただただ物も言えず口をぽっかりとあけていた。

そのうちに呆然としている私に騎士様が気づいてくださった。

私が顔を覗かせている窓の枠を手甲でこつこつと叩き、注意を促してくる騎士様に、気づいて視線を向けることにすら酷く気力と時間を費やした。そのまま彼は視線を合わせてくる。しかしじっと見ているばかりでは流石に何を言いたいかなど分からない。私が眉根を寄せて不審げにしていると、騎士様は兜の下半分をかしよんと下げて口ばくした。

そこでやっと気づいたのだが、私の耳に聞こえていなかっただけで、ずっと彼は私に向けて何かを言っていたのだろう。少し困った表情でゆっくりと口を動かしている。

(も ど っ て)

ふむ。どうやらちゃんと馬車の中に引っ込んでいろということらしい。私は合点がいったことを伝えるため数度こくこくと頷くと大人しく馬車の中央まで後ずさった。

怖い。

やっと感覚が戻ってきて、まず思ったのがこれ。

ただ人間がたくさん居るだけなのに、底知れない怖さを感じた。

数は力だ。人間がたくさん居るから？都という都市は頑強なのだ。と教えられた意味がようやく分かった気がする。確かにあれは力だ。途方もない力。

歩いていたのはほとんどが軍人ではなく、幼い子どもや華奢な娘も混ざっていたが、あれだけ全てが同じ方向へ敵意を向けたら、まず耐え切れるものなどないのではないか、とすら思う。

耳はまだ外のざわめきでざんざんと騒がしく、私は早く目的地まで着かないものかと膝を抱え込んだ。

しかし、私がこの防衛ポーズで考え込めたのはほんの束の間のことだった。

明らかに騎士様のものではない、遠慮が感じられない激しいノックが私の意識を浮上させた。返事をする間もなく、扉が勢いよく開かれた。

途端わずかに遮断されていた喧騒が阻むものなく私の耳を攻撃してきて、思わず肩がきゅつとすくみ上がる。だが、幸いにも扉はすぐに閉められ、暴力的なざわめきはもう一度扉の外のものになった。それはいい。それはいいのだが。

この、私の向かいに当然のように座っている少女は何なのだろう。亜麻色のたっぷりした髪を編みこんで横に垂らしているのが目を引く。服装もこれまたたっぷりと布地を使っていて、彼女の行動とは異なった、柔らかくおっとりとした印象を与えてくる。そして何より、何か幸せなことでもあったのか、というほどに笑み崩れた表

情が更に彼女を優しげに見せていた。

うん。とてもかわいらしい。

私の馬車に飛び込んでさえこなければ。

しかも、何も言ってこない。どうやらこちらから口火を切らなくてはいけないらしい。

くそう、ぼっちのコミュニケーション能力の低さを分かっていないな！

「あとう」

「はい」

はい、じゃないよ。何か説明か弁解かをしてほしかったんだよ。にこにこされても答えは出てこないんだよ。

「どうか、なされたんですか」

「はい。この馬車、都塔に向かっているでしょう」

「ええ、まあ」

「わたしもちようど都塔に行きたかったのよ。ですから、不躰ながら同乗させていただきました！」

「な、なるほど」

なるほど、とは言ったものの、幾らか解せないことがある。

まず、この馬車ってそんな乗り合い馬車みたいにして使って良いものだったっけ？ 外側の意匠には？ 都の紋がどかんと押してある、いかにも高級車、って感じのものだったと思うんだけど。

それに、これは10人程度とはいえ、兵に護衛されて運ばれているものだ。賓客か、あるいは危険人物であると判断できそうなものだが。

最後に、なにより、外で張っているはずの騎士様ガードをパスできているのが気になる。私には顔を出すなとか馬車から離れるなど

か言っておいて、外部からののはザルだったのか。

悶々と悩みつくす私を、少女は最初と変わらぬ笑みで見つめ続けていた。

笑顔というものは不思議なもので、そこに何らかの無邪気さを滲ませ、対する相手の心持も和ませてしまう。未だ不審であることには変わりないものの、特に危害を加えてくる様子も悪人的なオーラも感じられないため、私は少し警戒と緊張を解いた。

「ど、どうして都塔に」

「あら、失礼。そうよ、自己紹介していなかったのですものね」

「はあ、、、」

「わたしフィリ」

「どうも。私は、ホタルと、います」

「そう！ あなたはホタルちゃんね！ これからよろしくね」

何故彼女はこうも自分の時間の中で生きているのだろうか。それとも、私が気づくべきことを見逃しているだけなのか？

フィリさんの「これで分かったでしょ？」的な微笑を前に、もう一度問い直すことはどうにも心苦しかったが、仕方がない。意を決して私は同じ質問を繰り返した。

「あのう、すみません。それで、都塔に行く理由は」

「？ え？ ああ！ ああああ！ そっか！ 分からないわよねえ。ごめんなさいね言葉足らずで、気づきもせずに。理由はね、あなたと同じよ。元首様に呼ばれて」

「え」

「わたし、間違えてないわよね？ ガリソ村から来た、ホタルちゃんよね？」

確かに私の出身はガリソである。

そして、私と同じ理由と言う事は、この目の前の朗らかできゃらきやらした少女も、能力持ちだというのか。周囲から浮く程の、？都元首に目を付けられるほどの強力な力を持った人間だというのか。

世界がぐらりとまわるような感覚がした。

じゃあなんで、彼女はこんなに明るく幸せそうなんだ？

2 (後書き)

やっとお名前が出せましたね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7743x/>

その灯りの導く先は

2011年11月12日04時22分発行